

## 對馬路人教授退職記念号によせて

著者	難波 功士
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	128
ページ	7-8
発行年	2018-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00026759">http://hdl.handle.net/10236/00026759</a>

## 對馬路人教授退職記念号によせて

社会学部長 難 波 功 士

對馬路人先生は、1973年3月に東京都立大学（現首都大学東京）経済学部を卒業され、東京大学大学院社会学研究科に進まれました。同社会学研究科博士課程を終えられた後、日本学術振興会奨励研究員の期間を経て、1981年4月からは青森大学社会学部に専任講師として赴任されました。そして、1985年4月に関西学院大学社会学部助教授として着任し、1991年4月に同教授となり、1993年4月からは社会学研究科において指導教員を務められ、33年の長きにわたり本学で教鞭をとられてきました。

先生のご専門は宗教社会学であり、とりわけ日本の新宗教と呼ばれる教団の多く、さらには新新宗教と呼ばれるムーブメントや民間信仰について、地道なフィールドワークと史料収集・分析を積み重ねてこられました。

對馬先生の研究の拠点として、大きな役割を果たしてきたのが、関西圏の研究者を中心とした「宗教社会学の会」です。同会編『宗教ネットワーク：民俗宗教、新宗教、華僑、在日コリアン』（行路社、1995年）に在日コリアンの信仰・祭祀をあつかった「本国の親族組織と在日親族会」を発表されたのを皮切りに、同『神々宿りし都市：世俗都市の宗教社会学』（創元社、1999年）に「宗教と科学のはざままで：現代日本の「心霊研究」運動」を、同『新世紀の宗教：「聖なるもの」の現代的諸相』（創元社、2002年）に「宗教組織におけるカリスマの制度化と宗教運動：日本の新宗教を中心に」を、同『聖地再訪・生駒の神々：変わりゆく大都市近郊の民俗宗教』（創元社、2012年）に「「古いストリート」の今昔」などの論考を発表されています。これらは、宗教社会学の伝統・蓄積をふまえつつ、人々の精神、心のありようの微細な変化を注視し続けられた先生ならではのお仕事といえるでしょう。また、山中弘編『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』（世界思想社、2012年）に収められた「鉄道と霊場：宗教コーディネーターとしての関西私鉄」などは、観光社会学の隆盛といった新たな動向に呼応しつつ、ユニークな視点からの着実な歴史研究として高く評価されるべき論考といえます。

そして現在、對馬先生は、科学研究費にもとづく共同研究「複眼的視点からの大本教研究：データベース構築と国際宗教ネットワークの研究」（2015年度～2017年度）において研究代表者を務めておられます。先生の新宗教研究の集大成として、その成果の公刊が待たれるところです。以前NHKで「日本人は何を考えてきたのか」というテーマのもと、番組のシリーズが組まれたことがありましたが、その第9回「大本教 民衆は何を求めたのか：出口なお・王仁三郎」（2013年1月6日放送）にて、對馬先生は「第一次世界大戦の戦禍の大きさへの反省から、世界平和への願いが世界的に高まっていた状況を背景」とした出口王仁三郎の活動を「人々の信仰や宗教の壁を乗り越えることが世界平和には必要だとして、中国の世界紅卍字会道院やイスラム系のバハイ教と提携・協力するなど、国際主義的な運動を強く推進」と述べておられます（NHK取材班編『日本人は何を考えてきたのか 昭和編：戦争の時代を生きる』NHK出版、2013年、50頁）。この稀有な、スケールの大きな宗教者の全容解明を期待したいと思います。

こうした研究活動の一方で、對馬先生は、社会学部さらには関西学院大学の校務に尽くしてこられました。学部においては1987年4月から1992年3月までと1995年4月から1996年3月までの間、教務副主任を務められ、1996年4月から1999年3月まで教務主任、2005年4月から2006年10月まで学部長を歴任されております。大学においては1992年4月から1994年3月まで学生副部長、2000年4月から2002年3月まで教務副部長、2004年4月から2005年3月まで学生部長、2007年4月から2010年3月まで大学評議員、2010年4月から2011年3月まで入試部長、2011年4月から2013年7月まで副学長を務めら

れました。私は對馬先生以上に、学部・大学の双方において間断なく重責を担ってこられた方を他に知りません。

残された者たちにとっては、對馬先生のご退職はさびしい限りですが、ようやく研究に多くの時間を割けるようになった先生の、今後のなおいっそうのご活躍・ご健勝を学部一同願っております。